

グスタフ・フーゴーの法哲学における 自然法の概念と法人間学

——『実定法の哲学としての自然法』第1版(1798年)を素材として

耳 野 健 二

The Concept of Natural Law and Legal Anthropology in Gustav Hugo's Philosophy of Law:

Based on the First Edition of *Natural Law as a Philosophy of Positive Law* (1798)

MIMINO Kenji

1. はじめに

(1) グスタフ＝フーゴーの『実定法の哲学としての自然法』第1版と法人間学

グスタフ・フーゴーの法哲学は、近代法実証主義の成立との関連から重要な意義をもつとされ、近代法思想史の叙述では欠かすことのできない重要性をもっている¹⁾。その法哲学の書『実定法の哲学としての自然法』(以下『自然法』とよぶ)は、カントの認識論を手掛かりとし、経験に基づく法の哲学が展開された著作であり、その独創性は高く評価されてきた²⁾。その一方で、そのような研究状

1) Franz Wieacker, *Privatrechtsgeschichte der Neuzeit*, 2te neubearbeitete Auflage, Göttingen 1967, S. 378–381. Helmut Coing, *Europäisches Privatrecht*, Bd. II (19. Jahrhundert), München 1989, S. 41f. Annette Brockmüller, *Die Entstehung der Rechtstheorie im 19. Jahrhundert in Deutschland*, Baden-Baden, 1997. Haferkamp, Hans-Peter, *Die Historische Rechtsschule*, Frankfurt am Main 2018. Joachim Rückert, *Kant-Rezeption in juristischer und politischer Theorie (Naturrecht, Rechtsphilosophie, Staatslehre, Politik) des 19. Jahrhunderts*, in: John Locke und/and Immanuel Kant. *Historische Rezeption und gegenwärtige Relevanz*, hg. von M. P. Thompson, Berlin 1991, 144–215. フーゴーの法哲学を論じた日本語の文献については、歴史的かつ哲学的文脈においてフーゴーを扱ったいくつかの文献がある。河上倫逸『ドイツ市民思想と法理論』(1978年)、442頁以下。村上淳一「近代法体系の形成と「所有権」、『法学協会雑誌』第93巻2号(1976年)、147頁以下、とくに171頁以下。同『近代法の形成』(1979年)、105頁以下。矢崎光圀『法哲学』(2000年)、62頁以下。また、磯村哲「啓蒙期自然法理論の現代的意義」、同著『社会法学の構造と展開』(1975年)所収、はフーゴーについての言及はごくわずかであるが、啓蒙期自然法理論の思想史をふまえつつ、フーゴーの歴史的意義を指摘している(131頁)。なお、1800年見ごろの「法の学問化」の歴史的潮流におけるフーゴーの法学構想の意義を論じた研究として、拙稿「[学問]としての法の成立：18世紀末におけるグスタフ＝フーゴーの学問論」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』第36号(2021年)、139–174頁がある。

2) フーゴーの法哲学および伝記的情報について、以下を参照。Landsberg, *Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft*, Abteilung 3, Hlbband 2, Text, 2. Neudruck der Ausgabe, München 1910 (Nd. 1978), S. 1–48. Otto Mejer, *Gustav Hugo, der Begründer der historischen Juristenschule. Eine göttinger Erinnerung*, in: *Preußische Jahrbücher*. 44 (1879), S. 457–487. Ders., *Gustav Hugo*, in: ADB 13 (1881), S. 321–328. Jürgen Blühdorn, „Kantianer“ und Kant. *Die*

況にもかかわらず、本稿では、フーゴの法哲学について従来の研究で見落とされてきた課題があると考え、かかる課題を取り上げることで若干の貢献を行うことを目的とする。

フーゴの『自然法』は第1版が1798年に刊行され、その後繰り返し改訂が加えられ、1819年に第4版が刊行された。本稿では、第1版を特に取り上げ、分析の対象とする。

『自然法』にかぎらず、フーゴの著作の重要な特徴の一つは、それらが繰り返し改訂を施されたことにある。フーゴは、『市民法教程』という自らの法学教育課程の構想に従い、エンツィクロペディー、市民法の体系書、法史、そして法哲学について別個の著作を著わした。それらの著作は、改訂のたびに大幅に分量を増加させ、大部なものへと変貌していった³⁾。『自然法』について言えば、第1版では本文220頁（序言を除く）であったのが、第4版では554頁（同上）となった。

従来のフーゴ研究では、多くの場合、四つの版のうち、最終版である第4版を主な資料として活用することが多く、複数の版を活用する場合でも、各版の相違には意を用いていないように見える⁴⁾。むしろ、このような活用法に正当性がないわけではない。なぜなら、自分の著作に対するフーゴの改訂作業は、同一の著作に対して繰り返し施されることが珍しくなく、そのいずれにおいても、旧版に新たな情報を追加し、内容をより充実させるために実施されていたと思われるのであって、最終版がその時点で最も完成度の高い著作として位置づけられると考えられるからである。

これにくわえて、『自然法』の基本的構成が、第1版から第4版にいたるまで、複数の改訂を経て変わらなかったことも、その後の研究者たちが四つの版を明確に区別して活用することを妨げる要因になったと考えられる。すなわち、『自然法』の四つの版においては、法哲学の歴史と概念を扱う「序論」、法理論の経験的基礎を集約した「法人間学 [juristische Anthropologie]」、法理論を展開する「私法」「公法」という枠組みが一貫して維持されている。つまり、繰り返し本書は改訂されたにもかかわらず、基本的な枠組みは変更されておらず、フーゴは改訂を試みつつも、もっぱら内容の大きな変更を企てるよりも、内容の充実を図り続けていたように見える。このような事情を考慮するなら、フーゴの法哲学を論じるにあたり、最も充実した内容をもつと思われる第4版を資料として用いる

Wende von der Rechtsmetaphysik zur ‚Wissenschaft‘ vom positiven Recht, in: Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Bd. 90, Romanistische Abteilung, 1973, 305–345. Joachim Rückert, „… daß dies nicht das Feld war, auf dem er seine Rosen pflücken konnte …“? Gustav Hugos Beitrag zur juristischen-philosophischen Grundlagendiskussion nach 1789, in: ARSP Beiheft 37, Rechtspositivismus und Wertbezug des Rechts, S. 94–128. 翻訳として、拙訳『Historia juris 比較法史研究』第12号、p. 97–151を参照。またサヴィニーによるフーゴ論として重要な Savigny, Der zehnte Mai 1788, in: ders., Vermischte Schriften Bd. 4, S. 195–208については、次の研究がある。星山琳「フリードリヒ・カール・フォン・サヴィニーから見たグスタフ・フーゴ — 「1788年5月10日」に見るサヴィニーの理解 —」（『明治大学人文科学研究所紀要』第91冊（2024年）343–357頁。

3) Landsberg, Geschichte, S. 12, 14f.

4) 本研究で参照したフーゴ法哲学の先行研究として最も詳細なのは Rückert の研究（前出注2）であるが、ここでは、フーゴの『自然法』の各版を引用しているものの、あくまでフーゴの思想を再構成するために各版を参照するという手法を採用しており、各版の相違に留意しているわけではない。また、Blühdorn（前出注2）は、フーゴの『自然法』第2版と第4版を取り上げているにすぎない。Landsberg（前出注2）は、第1版にふれているが、断片的な言及にとどまっている。村上、矢崎の各研究（前出注1）も、第4版に依拠している。

ことは、理にかなっている。

しかしその一方で、本書の歴史的重要性を考慮するとき、次のようにも考えることができるのではないだろうか。すなわち、第1版の刊行（1798年）から第4版の刊行（1819年）まで実に二十年の歳月が流れている。これほどの長い時間は、一人の学者の思想に何らかの重大な変化や成長が生じてもおかしくないだけの時間である。それどころか、これだけの時間があれば、その学者が優れていれるほど、その思想は成長し、哲学的により深さを増していく、と想定すべきではないだろうか。とするならば、『自然法』の四つの版の著作をひとまとめに扱うのではなく、それぞれの版を別個に分析し、それぞれの個性を明らかにすることも、フーゴという重要な法学者の思想を理解するための一つの課題としての意味をもつのではないか。

実際、フーゴの『自然法』の四つの版は、基本的な構成が維持された一方で、その記述内容に着目するなら、変化が無いわけではない。たとえば、フーゴの法人間学に関する記述のうち、「理性的存在としての人間」の章の最初の節の記述を第1版 (§. 28)⁵⁾と第2版 (§. 78)⁶⁾とで比較してみれば、記述が全面的に書き改められたことは明らかである⁷⁾。これら各節は、その後続く「理性的存在としての人間」の内容をなす各節の総論であるから、これら後続の各節の内容もまた、第1版と第2版で異なっている可能性がある。くわえて、これら各節の記述内容は、経験を重んじたフーゴにとっての「理性」の位置づけを理解するうえで重要な箇所である。この箇所の記述に大幅な見直しがあったとすれば、そこでの修正がいかなるものであったのか、フーゴの法哲学を理解するうえで検討が必要ではないだろうか。

こうした理由から、フーゴの『自然法』の各版は、同一のタイトルと構成をもつ書物である一方で——少なくともその厳密な理解を志すならば——本来は各版の比較に基づき、その思想の発展史を追跡すべき作品ではないか、との疑問が生ずる。とするならば、そうした作業の前提として、まずは『自然法』の第1版に注目し、その内実を明らかにすることではじめて、同書のその後の各版との比較も可能になろう。このような理由から、本稿では、まずはフーゴの『自然法』第1版を取り上げ、その法哲学の特徴を明らかにすることを試みるのである。

(2) 本稿の課題と構成

以上の理由から、本稿では、フーゴの『自然法』の第1版を分析対象とする。そこで、まず同書

5) Hugo, Naturrecht, 1.A. (1798), S. 22 (§. 28).

6) Hugo, Naturrecht, 2.A. (1799), S. 90 (§. 78).

7) なお、「理性的存在としての人間」の冒頭の節の記述は、第1版 (§. 28) から第2版 (§. 78) への改訂のさいに大幅に書き改められたのち、第3版 (§. 60, §. 61)。記述量の増加に伴い二つの節に分割されたと思われる。)と第4版 (§. 62, §. 63) では、基本的に第2版の記述を踏襲しつつ、これに記述の追加を行っているようである。ただし、「認識能力」について、第3版のみ、「自然に適用される悟性」に含まれる「諸原理」について「構成的 [constitutiv]」という形容が与えられている (Hugo, Naturrecht, 3.A. (1809), S. 66 (§. 61))。

の構成をあらためて詳しく見たうえで、本稿の課題を明らかにすることとする。

フーゴの『自然法』第1版(1798年)の構成を詳しく示せば、次の通りである。すなわち、「序言 Vorrede」(S. I-X)、「序論 Einleitung」(S. 1-15 (§. 1-16))、「経験的予備知識あるいは法人間学」(S. 16-43 (§. 17-57)、以下たんに「法人間学」と呼ぶ)、「私法」(S. 44-210 (§. 58-257))、「公法」(S. 210-220 (§. 258-270))である。

「序言」では本書の自然法論としての性格が、とりわけ形而上学との関連から短く説明される。ついで「序論」では、古代ローマから近世までの自然法論をたどりつつ、自らの自然法論の歴史的意義を説く。それにつづく「法人間学」では、内容が三章に分かれたる。「第1章 動物としての人間」「第2章 理性的存在としての人間」「第3章 特定国家の市民としての人間」である。これにつづく「私法」は、最も分量が多く、頁数にして全体の約7割を占める。その内容は三つの章からなり、「第1章 人の法」(奴隷、婚姻、家長権、後見)、「第2章 物の法」(所有権、相続)、「第3章 請求と訴えの法」(契約、損害賠償、請求の効果等)である。「公法」は「私法」にくらべてはるかに分量は少ないが、「I 国家法」「II 国際法」「III 世界市民法」の三つの章に区分される。

このような構成から言えるのは、まずフーゴの自然法論の主要な内容が私法理論(「私法」のパート)だということである。この点で、本稿の主要な分析対象である「法人間学」が、歴史的にフーゴの重要な業績の一つであることは間違いないにしても、その位置づけが「私法」理論の「経験的予備知識 [Empirische Vorkenntnisse]」⁸⁾であったことは、確認しておかねばならない。実際、私法理論の記述には、「法人間学」の記述を参照しながら私法理論の説明をしている箇所がいくつも見られる。

以上をふまえると、フーゴの『自然法』の構成から、まずは次のことを確認することができる。すなわち、まず書物全体の性格を明らかにし(序言)、ついで「自然法」という主題そのものの意義を解明したうえで(序論)、法の基礎となる人間学を説明し(「法人間学」)、ついでこれを基盤として私法理論の説明を行う(「私法」)。つまり、私法理論を哲学的に基礎づけるという目的を達成するための構成をもっている。

『自然法』のこのような構成をふまえるなら、その内容の中核部分となるのは、「法人間学」をふまえて展開される「私法」の部分ということになる。換言すれば、私法理論の哲学的性格を明らかにするには、私法理論が「法人間学」の哲学的内容とどのような形で結びついているか、この点を明らかにする必要がある。しかし、本稿ではそこまでの考察を一挙に行うことはできないため、まずはその前提となる課題を扱う。すなわち、『自然法』における私法理論の哲学的基礎を提供するこの「法人間学」の内実は、そもそもいかなるものか、という問の解明である。くわえて、この問は、『自然法』における自然法概念と密接に結びついている。それゆえ、本稿においては、そこで論じられる「自然法」概念とこれと結びついた「法人間学」の特徴をまずは明らかにすることを課題として

8) Hugo, Naturrecht, I.A. (1798), S. 16.

設定する。

以上のような課題設定をふまえ、以下では、『自然法』第1版を素材としつつ、まずフーゴーのいう「自然法」概念を明らかにしたうえで（2.）、次に「法人間学」の概要を確認し（3.）、その特徴を考察する（4.）。

2. 『自然法』第1版における「自然法」の概念

フーゴーは、『自然法』の「序論」において、*ius naturale*の観念がローマ人に由来すること（S. 1 (§. 1) 以下、本文中の引用はすべて『自然法』第1版からの引用である）、*ius gentium*と*ius civile*の関係（S. 2 (§. 2)）にふれたうえで、グロティウス、ホップズ、プーフENDORFの名をあげつつ、17世紀にこれらの著作家たちが自然法について論じたが、「新たな学問」を創設するには至らなかった、と述べる。彼らは個々の法規の次元では、「実定的ローマ法として眼前に存在したものを、自然法と考える」点で一致していた（S. 2f. (§. 3)）。ついでグルントリンク、ゲアハルト、ヘンリヒ＝ケーラーが、「自然的強制法を実定法に近似させるため、権利者の単なる良心義務による全ての諸制約を取り去った」（S. 3f. (§. 4)）。この「自然的外的強制法の学問」はグリープナーにより、「I. 本来の自然法」「II. 一般国法」「III. 国際法」「IV. 一般市民法」の四部門に区分されたのであるが、この第四部門を重視し、それ以外を「完全に余分なものとして説明した」のがヴォルフとネットェルブラッドであった（ebd.）。

こうした動向に対して、社会契約論が現われる。この理論では、「まず国家の外部の人間たちを」、「一切の先立つ諸事実なしに」あるいは「所有権、契約、危害を前提として」考え、ついでこの人間たちを「社会へと」導き入れる、つまり人間たちが「契約を通じて国家へと入り込む」ことになった（S. 4f. (§. 5)）。これらを通じて、「個々の国家の実定法が規定することのできなかつたもの」あるいは「少なくともなんらかの所与の法が規定していなかつたもの」のために「不可欠の補完物が現われた」（ebd.）。

このような理論状況に対して、カントが「革命」をもたらした。「彼は人間の心情の諸力を、経験的なもの一切を分離しつつ吟味したのであり、かくしてとくに実践哲学において、自己の幸福という不幸な原理を非難しつつ、だがまた、一般的幸福という・正しいが派生的なものにすぎない原理をやはり激しく非難しつつ、行為者の格律と理性の立法との一致という単なる形式的原理を設定したのであり、かかる革命は、自然法にも多大な影響を与えた。」（S. 5 (§. 6)）

こうしたカントの見解は、自然法に対しても大きな影響を与えたが、批判もないわけではなかった。たとえばフィヒテは、かかる「道徳はたんに定式によって成立するにすぎず、その適用は常にこっそり入手されている」と説く（S. 7f. (§. 9)）。フーゴーによれば、カント自身、かかる誤りを免れているわけではなく、「彼もまた、理性認識のこの分野の純粹部門に、つねに経験的データに依拠する諸

適用を混入している」(S. 8 (§. 10)) のであった。

「理性認識」にかかわる法の「純粹部門」に「経験的データ」が入り込むとは、この「純粹部門」が「経験的データ」からひそかに法の実質的内容を取得し、これをもって、人為的に制定された実定法に優越する地位を、その「純粹部門」が主張する、ということを帰結しかねない。フーゴーによれば、従来の自然法論は多かれ少なかれ、法の実質的内容を説くことで実定法に優位する地位を要求してきたのであり、カントの上記の誤謬は、このような自然法論の立場を踏襲するものである。「近時の全ての自然法論において特徴的なのは、実定法規の有効性〔Gültigkeit〕がその自然法によって決定されるべきだという尊大さ」であり、かかる「尊大さ」は「人類への罪」である、とフーゴーはいう(S. 9 (§. 11))。

ここでフーゴーが強調しているのは、法の「特定の内容」を説く「近時の全ての自然法」が「実定法規の有効性」を決定することは誤りである、ということである。それゆえ、「実定法規の有効性」を決定するには、これとは別の自然法を考案せざるをえない、ということになる。

こうしてフーゴーは、カントの法論の形而上学の試みを評価しつつも、「理性認識」の「純粹部門」に「経験的データ」を混入させることを厳しく批判し、これら二つの部門を明確に分離することで新たな自然法論を樹立することを説くにいたる。フーゴーはこの点を強く自覚しつつ、自らの法哲学の課題を次のように述べる。

「つまり、〔そうした旧来の自然法とは〕別の道をとること、そして、それ自体としてはあまりに貧弱な・法論の形而上学を法人間学に、すなわち、動物としての人間、理性的存在としての人間、所与の国家の市民としての人間、これらについての経験的諸命題に結びつけることが、賢明である。」(S. 10 (§. 12))

つまり、フーゴーにとって、従来の自然法に代わる新たな自然法思想とは、法論の形而上学と法人間学について、これら両者を厳格に区別しながら、同時に両者を結びつけることではじめて成立する、ということになる。そして、法人間学は、「動物としての人間、理性的存在としての人間、所与の国家の市民としての人間、これらについての経験的諸命題」を解明する営みである。そして、興味深いことに、こうして成立した営みこそは、「哲学」と呼ぶに値する営みなのだ、とフーゴーはいう。

「そうしてそこ〔筆者注：法論の形而上学を法人間学に結びつけること〕から、妥当したことのある〔実定法〕、あるいはいまなお妥当する〔実定法〕、あるいはただ考えられうるにすぎない〔実定法〕、そうした多様な実定法について、個別の実定法の研究が与えうるよりも高次の観点から、哲学する〔philosophiren〕ことができる、すなわち、もろもろの原因と効果を探求し、もろもろの可

能性を相互に比較することができる。このことは、これまでではただ国法においてのみ生じていたが、非常に多くの理由から、主として私法において生じなければならないのであり、そうして得られる自然法を、他の者たちは好んで、実定法の哲学〔*Philosophie des positiven Rechts*〕、私法の政策論〔*Politik des Privatrechts*〕、立法学〔*Wissenschaft der Gesetzgebung*〕、と呼びたがる。だがこれは、いずれの場合でも、多様な著作においてその研究法があまりにも多彩である既存の自然法**の代わりとなりうる。」(ebd.)

すなわち、フーゴーのいう自然法は、「かつて妥当したことのある」実定法、「なおも妥当する」実定法、「ただ考えられうるにすぎない」実定法、といった多様な実定法を、「個別の実定法の研究が与えるよりも高次の観点から哲学する」ことで獲得される。その方法論は、そうしたさまざまな実定法の「原因と効果を探求し、もろもろの可能性を相互に比較する」ことである。このような営みを、フーゴーは既存の自然法に代わりうる「実定法の哲学」と呼び、これを「私法の政策論」「立法学」とも呼んだ。これがフーゴーにとっての「哲学すること」であり、今日でいえば、比較法研究に該当しよう。

こうした「実定法の哲学」の構想に応じて、フーゴーは、過去と現在のさまざまな実定法を、「哲学、歴史、地理学などによる〔実定法とは〕別種の精神的作品と結びつける」(S. 11f. (§. 13)) 必要性を説いた。そのための資料として、歴史家の著述や旅行記、各民族の法典、法律学の著作、法典等々が、あげられる (S. 12 (§. 14))。

だが、フーゴーのいう「哲学すること」とは、このような多様な経験的事実を集積することに尽きるのではない。これを実務において活用する場合について、その意義を次のようにフーゴーは説く。

「……実務それ自身において、この学問は、あらゆる何らか過酷な法〔*jedes etwas harte Recht*〕は自然法に反するという軽薄で危険な諸観念を阻止するのであり、あるいはまた、この学問だけが、今日非常に頻発する私法の改良の試みの、模倣に値する警告的実例を示すことができる。」(S. 12 (§. 13))

ここでは「実務」を念頭に置きつつ、二つのことが語られている。一つには、仮に厳しい規範が実定法として存在しているとしても、それを高次の自然法に依拠する手法によって批判するのは、「軽薄で危険」であるという考えである。たとえばライブアイゲンシャフトや貴族の排他的権利について、これらは実定法でないと叫んだところで、実際に裁判官としてそれらを無視して判決を下すことができるだろうか、とフーゴーはいう (S. 9 (§. 11 *))。この点で、フーゴーは現実存在する「実定法」のもつ規範性の重みを認めていることが明らかであろう。

その一方で、いま一つには、この「実定法の哲学」は、「私法の改良の試みの、模倣に値する警告的実例」を示す。つまり、現代の立法改革について、これを批判するための実例を提供しうる。その限りで、フーゴの「実定法の哲学」は、たんに現状肯定の機能だけをもつわけではなく、批判的観点をも提供することになる。

3. 『自然法』第1版における「法人間学」の概要

(1) 「法人間学」の構成

次に、フーゴが新たな自然法の基盤として設定した法人間学、すなわち実定法のための「経験的データ」がいかなるものか、確認していこう。

フーゴの「法人間学」は、「動物としての人間」「理性的存在としての人間」「特定の国家の市民としての人間」という三章の構成を取る。これら三つの観点を取る理由について、フーゴは『自然法』第1版では明示していない。だが第2版以降の各版の「法人間学」の冒頭には、いずれもこの観点がローマ法の *ius naturale*, *ius gentium*, *ius civile* の区分に従うものであることが述べられている⁹⁾。先にふれたように四つの版の構成が同一であるのと同様¹⁰⁾、いずれの版においても、「法人間学」の構成は第1版と同様の三章構成を取っているから、他の版と同様の理由から、第1版においても三章構成を取ったと推測してよいであろう。以下では第1版における法人間学の記述を簡単に概観しておこう。

(2) 動物としての人間

「動物としての人間」とは、「法的意味での人間」が「理性ではなく」、「特定の態様の動物性〔Thierheit〕」をもつことをいう。この場合、理性はかかる「動物性」に即することについてのみ命令を下すことができるのであり、「制約された人間理性」は多くの事柄には決定を下さず、それを動物性に委ねる (S. 16 (§. 17))。このようにフーゴは、人間をまずは動物と共通する観点から捉えうることを述べ、人間を「有機体〔organischer Körper〕」と言い換える。

「有機体とは本性上、その諸部分が目的と手段として相互に関係しあう一つの全体である。有機体は、その有機的組織〔Organisation〕を有し、これを維持し、伝達する力をもつが、この力は制限されており、それゆえ、有機的組織からの個々の諸部分の分離作用は、ちょうど有機的組織の崩壊それ自身がそうであるように、阻止することはできない。」(S. 17 (§. 19))

9) Hugo, *Naturrecht*, 2.A. (1799), S. 69 (§. 56). Ders., *Naturrecht*, 3.A. (1809), S. 45 (§. 39). Ders., *Naturrecht*, 4.A. (1819), S. 49 (§. 38).

10) 本稿前出 88 頁参照。

あるいは、

「したがって、同一種の有機体は、けっしてすべてが同時に存在するわけではなく、相互に原因と作用のような、あるいは作用とその原因のような関係にある。そこから、それら有機体どうしの類縁関係が成立し、この類縁関係がそれ自身として、有機的組織の特質を示すわけである。有機体は、つねに自己の外部にある他の物質を求め、これをその有機体は次々に自らの組織に取り入れ、ふたたび排出する。有機体は、異なる時間においては、けっして完全に同一の諸部分から成り立っているわけではない。」(S. 18 (§. 20))

フーゴーは、このような「有機体」のもつ性格が、生命一般にかかわる現象を産み出すという。すなわち、あらゆる有機体の生命は、何らかの事故等により死去する場合以外は、つねに「自然死」を免れず、ここから老若、壮年期という生涯の区分が生じる。また、病気＝阻害された有機的組織、健康＝阻害されていない有機的組織という違いも生じる。

フーゴーは、このような「有機体」が「感覚 [Empfindung]」をもつ場合、これを「動物」とよぶ (S. 18f. (§. 21))。さらに、「哺乳動物 [Saugthieren]」では、他の動物と同じように、男性と女性という「二つの有機的存在」により生殖を行う (S. 19 (§. 22))。さらに、母体において最初の養育が準備されるが、乳児はそれ自体として動物として存在しうる (S. 19 (§. 22))。

また、人間は「二本の手と二本の足をもつ」(S. 20 (§. 23)) 動物であり、「道具を作るという一般的本能をもつ」(S. 20 (§. 24))。「人間は道具を制作する動物である。人間は物を自身の肉体の一部として使用し、それはただ一回のことではなく、繰り返しそうするのであり、しかもあらゆる種類の物を、動物も、そして他の人間までをも、そうするのである。」(S. 21 (§. 24*))

さらには、人間の口は言語を用いるようにできている。人間の住居は地球の全表面にわたる。また人間は動物と植物を食物として利用する。人間の寿命、空間、飲食、空気、生殖、等々の諸欲求、人種が存在なども人間の条件としてあげられている。フーゴーは、人間はこのようなさまざまな条件の下に生きる存在であることを免れないので、自由ではない (S. 21 (§. 26)) し、平等でもない (S. 21 (§. 27))、という。

(3) 理性的存在としての人間

フーゴーによれば、人間は人間以外の動物と異なる力をもつのであって、そうした力は、人間と「他の人間との社会的結合 [Gesellschaft]」においてはじめて発展する。その力こそは「理性」であり、これは「言語」と「認識能力」において、あるいは「人間行為の倫理的価値判断および法的価値判断 [sittliche und juristische Beurteilung]」において具体化される。(S. 22f. (§. 28))

(a) 言語と認識能力

フーゴーによれば、言語は「感性的イメージと悟性概念のための、聞き取り可能な記号から成り立つ」(S. 23 (§. 29))。そして「言語と共に」「高次の認識能力」が発達するのであり、これらは「狭義の悟性、判断力」とも呼び代えられる。つまり、言語があつてはじめて、「高次の認識能力」としての「悟性」ないし「判断力」を人間は用いることができる、ということと解される¹¹⁾。そしてこの場合、「可能性〔Möglichkeit〕と必然性〔Nothwendigkeit〕のカテゴリー」が基礎に据えられる。これらのカテゴリーは、人間的行為に対して、「物理的〔*physisch*〕、道徳的、法的」に適用される (S. 23 (§. 30))。

注目すべきは、このような認識能力により得られる認識が、フーゴーにとっては、「内的根拠」により支えられる必要がなかったことである。「認識」が依拠するのは、「内的根拠」ではなく「先入見〔*Vorurtheile*〕」に基づく「合意〔*Uebereinstimmung*〕」なのであって、このことを、フーゴーは次のように述べる。

「このような認識能力において、内的根拠を自ら考察することは必ずしも可能ではない。というのも、そのための時間や力が欠けていたり、とりわけ未来の偶然的発見を予測する場合に起こりうるように、内的理由は確実性を与えなかったりするからである。つまりこの場合には、(信義誠実に基づいて) 受け入れられた意見あるいは先入見が、すなわち、詳細な考察なしに真だと考えられる命題が、助けとなる。そのうちの非常に多くは、もっともすべてではないが、真の啓蒙を通じて、すなわち詭弁を弄するのではなく、たんに内的根拠に従っただけの完全な吟味を通じて、停止される。ほぼすべての意見や先入見は慣習 (§. 28) と他者の権威、すなわち、家族であれより大きい社会であれ、ともに生活する人間たちとの合意、に依拠している*。」(S. 24 (§. 31))

フーゴーは、「先入見」を「内的根拠」に基づく「吟味」に対比させつつ、前者の重要性を強調している。「先入見」は、「受け入れられた意見」であって、十分な根拠を伴っているとはかぎらない。それは、純粋に「内的根拠」に基づく「吟味」により否定される可能性がある。それにもかかわらず、フーゴーはそれが「慣習」や「他者の権威」、すなわち家族や社会など、「ともに生活する人間たちとの合意に依拠している」がゆえに、その重要性を否定しないのである。そのような意味において、先入見は、誤謬のみならず真理をも含みうるとされる (S. 24 (§. 31 *))。

11) フーゴーは『自然法』第2版では、「人間悟性は *discursiv* である」と述べている。「われわれは、概念を通じて、非常の多くの事物において存在した表象の表象を通じて、思考する。それを行うのが言語、一群の一般的記号、である。」それは、「一過性の行為」において、あるいは「聞き取り可能な談話」において、あるいは、「(さまざまな時代とさまざまな場所で意味を与えられた) 文字」において存在する (Hugo, *Naturrecht*, 2.A. (1799), S. 91f. (§. 79))。

(b) 道徳的価値判断

ついでフーゴーは、道徳的価値判断についても見解を述べている。フーゴーによれば、自己および他人の行為を道徳的に価値判断することは、可能性と必然性のカテゴリーを物理的に適用する場合とは異なり、「快・不快の感覚」を引き起こす。そのような道徳的価値判断にあたっては、「人間」は「人間ならざる他の理性的存在者」を考慮して、自らの経験における欠陥を補うのであり、それはつまり、「神的なもの〔*Gottheit*〕を想定するという非常に強い傾向をもつ」。こうした想定をもつことが、人間の行為の新たな動機となる（S. 25 (§. 32)）。

フーゴーによれば、道徳的価値判断は、「状況と動機の違い」によって多様なものがありうる。人の死ですら許容されうる場合があるし、はたまた、人の誕生ですら許容されえない場合があるとフーゴーはいう。このような道徳的価値判断を下すさいの重要な指標としては、「実質的特徴」に従う場合と「形式的特徴」に従う場合がある。前者は、行為が行為者と他人にとって快適・有益〔*angenehm und nützlich*〕であるかどうかが価値判断の指標となる。後者は、行為の結果が意思の影響を偶然的に受けて生じたにすぎないのか、それとも、行為者がその行為を正当と考えたから実行したのであり、そうでなければその行為はなされなかったのか、という点に着目する（S. 25f. (§. 33)）。

さらにフーゴーは、道徳的価値判断にあたって、先入見の根底に潜む他者との「合意」が作用することを確認している。というのも、「行為の実質それ自身が、他人の判断に依存していることが珍しくない」から。たとえば、「他人が礼儀だと解することだけが礼儀であるにすぎないがゆえに」、道徳的価値判断にあたっては、「他人の判断をも考慮されねばならない」のである（S. 26f. (§. 34)）。

このように述べたフーゴーは、こうした道徳的価値判断の対象となる行為には、他人に対する強制の対象となる場合がある、という。「強制義務とは、その侵害が強制を正当化し、強制と見なされる義務」にして、「最も欠くべからざる義務」であって、それは「合法的〔*rechtsmäßig*〕な強制によるものとされる（S. 27 (§. 35)）。こうしてフーゴーは、道徳的価値判断のうちの何らかのものが、強制可能性を通じて法的価値判断へと移行しうることを示唆するのであった。

(c) 法的価値判断

フーゴーによれば、当事者ではなく「他人」により、「共同の強制機構」において、「裁判官の判決」に従ってどの程度の強制が期待されるのか、このことが、法的価値判断の核心をなす¹²⁾。そのさいフーゴーは、ここには一つの「関係〔*Verhältnis*〕」が成立する、と述べる。

「(当事者によってでもなく、その見通しによってではなく、) 他人によって、共同体の強制機構に

12) フーゴーは §. 38 においても、「全ての法的価値判断は、裁判官を前提する……」と記している。Hugo, *Naturrecht*, 1.A. (1798), S. 30 (§. 38).

において、裁判官の請求に従って、どの程度強制が期待されうるのか。これが法律学的価値判断であり、かかる価値判断が何より、強制義務、法律学的義務、法的義務、あるいは権利についていう法律学的権利、これらの義務と権利の確固たる特質をなす。いまや、ある関係が成立するのであって、この関係は、その利益のために強制が適用されるべき者の側については厳格権〔*ein strenges Recht*〕と呼ばれ、他方の側については厳格な責務〔*eine strenge Schuldigkeit*〕と呼ばれる。そしてこの場合には、一切の道徳性と一切の不完全義務が捨象され、その結果、合法性〔*Legalität*〕だけが、それもこの合法性だけが意図されるのである。」(S. 28 (§. 36))

ここにいう「関係」とは、法的価値判断の対象となる、人間どうしによる権利義務の「関係」である。そこでは強制により秩序が保障される。すなわち、「その利益のために強制が適用される者の側」については「厳格権」が保証され、その反対の者の側は「厳格な責務」が課せられる。ここでは、強制を伴わない「一切の道徳性」と「一切の不完全義務」は捨象され、「合法性」に基づく秩序の実現だけが企図される。つまり、ここでは、当事者に対して、裁判官により当該行為が強制を通じて命じられる。

そこから生じる当為の性格をフーゴーは「このような法的価値判断から生ずるのは「新たな可能性」と「必然性」である」と述べて、それを次のように説明する。

「法的価値判断からは、新たな可能性（～することができる、～してよい）、必然性（～しなければならない、～すべきである）、が成立するのであり、これらはまさに物理的というよりもまさに道徳的である。この価値判断が物理的であるというのは、共同体の強制に対する反抗を貫き通すことはできないであろうからであり、この価値判断が道徳的であるというのは、この反抗を決して試みてはならぬということが義務であるからである。」(S. 27f. (§. 36))

すなわち、「可能性」（「～することができる、～してよい」）と「必然性」（「～しなければならない、～すべきである」）を示す表現を用いることで、責務として課せられる行為が判決を通じて支持される。重要なのは、これらの意味するところは、物理的意味の指示であるばかりでなく、道徳的意味での指示でもあることである。というのも、共同体による強制に対して被告による物理的な抵抗は不可能であり、その一方で、かかる強制に対して抵抗を試みないことが強制を課せられた者の義務であるからである。

こうして、法的価値判断の様式を言語表現と結び付けて説明するフーゴーは、それらが準拠する法規則について次のように述べる。すなわち、フーゴーによれば、法的価値判断のための特別の規則は、諸民族〔*Völker*〕において異なりうる。これらの規則は変更されることも可能だが、いずれにしても、

「それ自体として道徳的不法ではありえない」。なぜなら、「人間たちが相互に並んでひとつの法的状態において生活すべきであるなら、個々人の不同意、他人の確信からの個々人の確信の逸脱は、〔法的状態への〕反抗にいたるまで悪化してはならない」からである。これを言い換えると、「本質的に他人たちの共同作用に依存するものにおいて、これら他人たちの確信を考慮しないなどということは、すべての理性的存在のための一般的法則では決してありえない」のである（S. 29 (§. 37)）。

このように述べてフーゴーは、法規則そのものが民族により異なることは認めつつ、しかし、その内容がどのようなものであれ、それが法である以上、その法は当該民族〔Volk〕の人びとの「確信」〔Ueberzeugung〕が相互に一致することに依拠するとする、という。このような「確信」の一致のゆえに、ある個人による法への抵抗は否認されざるをえない¹³⁾。

こうしてフーゴーは、「理性的存在としての人間」についても、「人間は自由ではないし、平等でもない」という。「理性的存在として、人間は……認識能力において制約を受ける」し、「意思に関しても制約を受ける。」つまり、人間の能力にはいずれにしても限界があるのだから、人間は、「自分たちがなしうること、なしたいと欲することの一切を道徳的・法的になしてよいわけではない」し、「道徳的・法的になすべきことの一切をなすべきであるわけでもない」（S. 31f. (§. 40)）¹⁴⁾。このように述べることで、フーゴーは、「理性的存在としての人間」においても、その自由と平等にはさまざまな制約が存在しうることを強調した。

（4）特定の国家の市民としての人間

フーゴーによれば、「特定の国家の市民としての人間」とは、「法的状態」において何らかの「区分された形でのみ相互に共存する」。これは、複数の諸国家が存在し、それらに分散するかたちで人間が生存していることを意味する。これら多様な諸国家は、「1. 地理的状态、2. 国制、3. 教会の状態、4. 文化」という四つの側面から考察される（S. 34 (§. 42)）。これらについての記述のうち、最も分量が多いのは「文化」についてのそれである。

フーゴーは「文化」について次のようにいう。ある国民の文化は四つの段階が区別される。1. 狩猟と漁労、2. 牧畜、3. 農業、4. 商業、である。これらのうち商業の段階では、国民のある一部の人びとは、生計手段を自ら産出するのではなく、分業の原理に従う。とりわけ製品の加工やそれらの遠隔地への輸送を他人のために引き受ける。ここでは、分業が進めば進むほど時間が節約され、ますます多くの労働が提供されるが、そのせいで「労働者はますます、その能力の一般的教養において後れを取ったままにされてしまう」（S. 37f. (§. 48)）。

13) この点について、サヴィニーの法源論（民族における共通確信、民族精神）との関連が想起されよう。この点について本稿後出注16参照。

14) フーゴーはそうした制約として、人間の属性による制約（年齢、性別、障がい、人種）もあげている。Hugo, *Naturrecht*, I.A. (1798), S. 33 (§. 41).

他方、文化をもつ国民においては、学問的教育もまた生ずる。自然についての知識、道徳・法学、神学がそれである。これらは文字の成立と結びつき、そこから学者が、そして学問を口頭・文字により伝達する教師が生ずる (S. 38 (§. 49))。また、内政・外交上の強制を実施するために、特殊な身分が成立する (S. 39 (§. 50))。こうして、文化をもつ国民においては、自らの生計の手段を専門家身分、すなわち「その業務を生計のためになしうる多くの人間」に委ねる、という現象が生じる。また、取引が可能となるために、一般的交換手段としての貨幣が必要となる (S. 39 (§. 51))。また、これらにくわえて、文化の発展は、人間の欲求の多様化を可能にする。奢侈が成立し、生計活動は洗練されたものとなる。性的本能は粗野なものから愛へと高められる。退屈に対して遊びが発明され、知識欲、美術・音楽、喝采を受けたいという欲求（虚栄心）が促される。このように、人間が国民として文化をもつようになれば、専門家への分業が進み、貨幣経済が進展し、欲求を満たす文化の発展が生ずる、というのがフーゴーの認識である。

ここで注目すべきは、フーゴーにはすでに貧富の差の発生についての認識が明示されていることである。「ある国民が文化をもてばもつほど、その国民には、貧富の大きな差が生じかねなくなり、ますますこの差異は世代を超えて受け継がれる、すなわち、誕生の偶然に委ねられる。」(S. 39 (§. 52)) この点でフーゴーは、文化の発展が消極的帰結をもたらすことがありうることを見逃さなかった¹⁵⁾。

以上の記述には、社会の経験的現実を記述するというフーゴーの徹底した立場が見て取れる。このような立場からすれば、現実の人間は自由が保障されているとはいえない。

「市民としても人間たちは自由ではない、なぜなら、国家に属しておらず当該の法をまったくあるいは必ずしもつねに尊重しない人間たちが存在するから。なぜなら、ある所与の土地においてはつねに国制も与えられる、つまりは、地理的諸規定をとともう実際に存在する諸国制のあいだでのみ、国制は選択されうるにすぎないから。なぜなら、いずれかの国家において、個人は政府に服従しなければならないから（多数者民主主義）。なぜなら、宗教的理念が幾つもの制約をもたらし、最後に、文化が、労働と専門的技能の分業を通じて、そして諸欲求の多様化が、同様にまさに自由に反作用をもたらすから。」(S. 41 (§. 55))

このように、人間は近代の国家、社会、文化がもたらすさまざまな制約のなかで不自由を強いられる。こうした個々人における自由への制約は、それら個々人の間での不平等を引き起こさざるをえない。

15) フーゴー『自然法』第4版において、同様の趣旨の記述がみられることについて、村上淳一による分析がある。村上、前出注1を参照。

「ここからおのずと大きな不平等が生ずることになる、すなわち、多様な諸国家の構成員のあいだに、支配者と被支配者とのあいだに、多様な宗教的關係者たちのあいだに、多様なビジネスの間に、学ばれた知識の程度に応じて（とりわけある国民において書法をもち、個人が読み書きできるかどうか）、公的強制への寄与に応じて、欲求の洗練に応じて、教育と財産に応じて、不平等が生ずる。かかる不平等は、行為に依拠し、偶然＊）に依拠するものであって、行為それ自身もしばしば偶然的である＊＊）。」(S. 41f. (§. 56))

フーゴーはこのように、個人の境遇を環境の偶然性に関連させて説明する。実際、「誕生地、生まれた時代、両親」を個人は選ぶことができず、偶然に委ねざるをえない(S. 42 (§. 56＊))。また、自分の行動としても、他人の行動をまねることが珍しくなく、またほんのちょっとした思い付きが生ずること、ある行為を行うことを思い止まることもあるだろう。約束によって新たな義務の引き受けを承認したとしても、これまた、変化しうることもあるのではないだろうか(S. 41f. (§. 56＊＊))。このように、フーゴーは、現実の社会においては個々人に与えられる生存条件が平等ではなく、また不確定な要因が存在し、さまざまな点で偶然に依存することを強調する。

4. まとめ——『自然法』第1版における自然法概念および法人間学の特徴

最後に、フーゴーの『自然法』第1版における自然法概念および法人間学の特徴を整理し、その思想的含意を論じる。

(1) 「哲学すること」と自然法

まず、フーゴーが『自然法』第1版で明らかにした、自然法概念を整理しておく。フーゴーは、自然法概念を明らかにするうえで、考察方法の核となる方法論を明らかにした。それは、「理性認識」の「純粹部門」と法の「経験的データ」とを適切な形で結びつけること、言い換えれば、法論の形而上学と法人間学とを適切な形で結びつけること、であった。だが、この結びつきが具体的にどのような形をとるべきとされているのか、この点をフーゴーの記述から明確に読み取ることは難しい。ただし、そうした結びつきをふまえて記述される『自然法』における「哲学すること」とは、フーゴーの記述に従うなら、過去と現在の多様な実定法を素材とした比較法研究であった。このような比較法研究は、実定法源にくわえて、旅行記等の歴史的資料をも検討材料として考慮する。だが、この研究は、過去の素材が示す法をそのまま記述することだけを企図する営みではない。ここでは、過去の実定法（「かつて妥当したことのある」実定法）、現行の実定法（「なおも妥当する」実定法）だけでなく、想定上の実定法（「ただ考えられうるにすぎない」実定法）までもが研究対象となり、それら

のさまざまな可能性を比較することを通じて、現行法の改良に対する批判的観点が提供されることがありうる（「私法の改良の試みの、模倣に値する警告的实例」を示す）。この点で、フーゴーの見解は、たんに法の現状に追従する立場を説くものではなかった。

こうして、フーゴーのいう「自然法」の概念が明らかになる。経験的素材に基づく比較法研究を「哲学すること」と呼び、それに基づいて得られる、現行法に対する批判的観点をもたらすさまざまな実定法が、「実定法の哲学としての自然法」と呼ばれる。

（2）法人間学の構造とその意義

そうした「自然法」のための「経験的データ」を提供するのが、法人間学である。ここで注目したのは、この法人間学が「経験的データ」を提供するものとされながら、その一部として人間理性に基づく知的営為の次元を包含するという複雑な構造をもつという点である。

法人間学が、「動物としての人間」「理性的存在としての人間」「特定の国家の市民としての人間」という三つの章から構成されることはすでに見た。そして、二つ目の「理性的存在としての人間」には、「形而上学」と呼ばれる「合法性」の理論が核心的要素として含まれている。つまり、フーゴーが法律学の基礎として設定した「法人間学」は、総体としては実定法の経験的基礎を提供するものとされながら、その中核部分には、理性の次元が含まれる、という構造になっている。その限りで、フーゴーにとっては、理性は経験に従属する位置づけが与えられていることになる。すなわち、「形而上学」は経験の下位にあり、そのため理性が経験により制約されうる、ということになる。

フーゴーによれば、理性は「言語と認識能力そのもの」「人間行為の倫理的価値判断」「人間行為の法的価値判断」に存在するのであって、その各々において、制約が事実として存在する。すなわち、認識能力においては、「内的根拠の探求」が時間的条件や本人の力量から不可能である場合は、「先入見」が助けとなる。あるいは道徳的価値判断においては、人間の誕生ですら、その人間を取り巻く現実的・社会的文脈に依じて価値判断が分かれうることもありうる。法的価値判断に用いられる諸規則もまた、民族ごとに異なるのであり、各々の民族において「法的状態」が確立しているならば、外部から見ればその秩序がいかに不道徳に見えようとも、その民族の構成員はその秩序に従って生きねばならない¹⁶⁾。

16) この点でフーゴーの見解には、リュッケルトが指摘するように、自生的秩序の思想を想起させる点がたしかに含まれている。Joachim Rückert, *Juristische Methode und Zivilrecht beim Klassiker Savigny (1779–1861)*, in: Joachim Rückert, *Savigny-Studien*, Frankfurt am Main 2011, S. 579, 599. リュッケルトは、ここではフーゴーについて、「とくに1812年以降」の文献を念頭においている。また、リュッケルトのこの論文はサヴィニーの法学方法論を主題とするが、その文脈でフーゴーへの言及がなされている。その要点を本稿の主題との関連から補足的に述べておくと次のようになる。サヴィニーは、法源として、いわゆる民族精神ないし民族の共通確信を取り上げつつ、法の歴史的生成を強調した。この見解では、民族 Volk が法形成の実体として想定されており、法形成の「内的必然性」が強調される。リュッケルトは、そこに客観的観念論に通ずる理性の客観化を見た。つまり、法形成の歴史的過程には、理性の内的で必然的な作用が働いている、というのである。これに対してフーゴーの法

こうして、フーゴーの法人間学においては、その全体を「経験的データ」の集合体として解釈しつつ、その下に理性の作用を位置づける、という構造をもつことが分かる。

(3) 「関係」概念の位置づけ

第三に指摘したいのは、それにもかかわらず、フーゴーの法人間学では、決して理性の作用が貶められているわけではなく、それどころか、法哲学的に重要な役割を与えられていることである。その端的な要点として、「関係」概念の意義をここでは指摘する。

フーゴーの法人間学の「理性的存在としての人間」において、法的価値判断が、道徳性ないし不完全義務を捨象しつつ、「関係」を基礎として「合法性」の地平において捉えられている。つまり、強制を伴う規範性によって、「関係」の秩序が形成されることが想定されている。また、ここに含まれる権利・義務の関係を、言語表現に置き換えるなら、それらは「～することができる、～してよい」（可能性）ならびに「～しなければならない、～すべきである」（必然性）と表現することができる。しかし、ここでフーゴーは、これらの表現は、「物理的」意味のみならず、「道徳的」意味をももつ、という。すなわち、それらの表現が指示する行為は、物理的に強制されるのであるから、それらの法の受け手たる市民はそれを物理的に拒否することはできない。また、それらの表現が指示する行為は、規範として市民に与えられるのであるから、これを遵守する意欲をもつことが市民には義務付けられることになる。つまり、いずれにしても、市民は与えられた規範を前提に、これに従うことが期待されることになる。

こうして、フーゴーは、強制を伴う実定法上の「関係」を特に取り上げ、「合法性」の地平にある法的関係として設定する。これこそ、フーゴーの考える「法関係 [Rechtsverhältnis]」概念の説明にあたるのではないだろうか¹⁷⁾。「法関係」は、サヴィニーが哲学的基礎付けを与え、私法体系の基礎に組み込んだ法哲学の基本概念である¹⁸⁾。フーゴーも、『自然法』第1版において、上記のような「関係」概念の彫琢を実施したうえで、それに続く節において私法の分類を説くにあたり、「法的関係 [rechtliches Verhältnis]」の概念を使用している。つまり、フーゴーにとっても法的「関係」の概念は、その私法理論の哲学的基盤をなす概念の一つであった。ここには、フーゴーからサヴィニーへと近代法学が形成される歴史的過程における重要な思想的連関が隠されている可能性がある。

人間学は、「動物としての人間」と「理性的存在としての人間」と「特定の国家の市民としての人間」の三者を区別して法の在り方を論じている。すなわち、サヴィニーが一体として見た民族内の法形成の作用を分解し、それぞれに別の役割を与えている。自生的秩序形成を想起させる理論は、「理性的存在としての人間」において論じられ、「特定の国家の市民としての人間」では、法と偶然との関係が繰り返し強調されている。

17) Hugo, *Naturrecht*, I.A. (1798), S. 44 (§. 58). ここでフーゴーは、合法性概念を論じた §. 36 を明示的に参照している。

18) サヴィニーの法関係概念については拙稿「〈関係〉を基礎とする法秩序——サヴィニー法体系論における法関係の意義」、『Historia Juris 比較法史研究』、14, 162–231 頁を参照。